

愛媛に関する地理書アーカイヴス

横山 昭市 (愛媛大学名誉教授)

1. はじめに

1) 「愛媛の地理」20号発刊に寄せて

愛媛地理学会の機関誌「愛媛の地理」が本年(2010年)に20号の刊行をみたことは、当学会の設立(1967年5月)と学会誌「愛媛の地理」の創刊(同年10月)に微力乍ら故村上節太郎先生(愛媛大学文理学部教授)に協力してきた筆者にとって、その後43年に亘って、学会活動と学会誌刊行を継続されてきた関係各位の努力に先ず敬意を表したい。

「愛媛の地理」は、学会の活動を活字印刷することによって、会員の研究や愛媛大学における地理学教室(文理学部と教育学部)の動向を社会的・文化的「財」として広く世間に提示する目的で刊行されたが、学会創設当初は学生会員を含め僅か50余名の会員でありながら、創刊号からカラー表紙をはじめ写真など多くして極めてビジュアルで出版費をかけた意欲的機関誌であった(写真参照)。「志の高い」機関誌だった一方で、会員拡大が予想外に伸びず「武士の商法」の類になって、結局カラー表紙は3・4号合併号(1971年3月刊)までとなり、加えて毎号約30万円、400部印刷の経費負担に耐えられず、5・6号も合併誌(1973年3月刊)として刊行せざるを得なくなったのである。カラー表

紙の号はA5版で当時の雑誌一般の版型に準じたが、5・6号以降はB5版に変更し、経費の事情で2～3年ごとの刊行と同時に特集号形式として編集することとなった。ただし、財務状況改善への努力によって13号(特集・国際化時代の地域研究)以後、隔年刊が持続されている。

付言しておきたいことは、「愛媛の地理」は地方の学会誌であるが、刊行費の負担軽減に広告収入が相当の役割を占めてきたことである。特に学界関係者から注目されたのは、東京の二宮書店や大明堂、内外交易など著名な地理学関係出版社の広告、ならびに地元の有名企業からも広告掲載があったことで、これらは地方出版物として「品格」を高めることができたと言ってよい。応諾頂いた掲載各社にも改めて感謝したい。

2) 本稿の目的とその背景

本稿は、「愛媛の地理」20号の刊行を機に、愛媛県に関する地理学研究の展望を主として単行本を対象に、特定の自然地理学や人文地理学、ならびに総合的研究の地誌書のなかで、研究書とされるものを、筆者の選択によってアーカイヴス(Archives:記録保管)として記したものである。これらは、筆者の所蔵によるが、その多くは著者寄贈によるものの、地誌書以外の分担



創刊当時の「愛媛の地理」(1～6号)

執筆単行本や市町村誌などは除外した。換言すれば、背文字で愛媛県に関わる地理書であることに限定させて頂いた。この種の選書紹介は、故浮田典良（1928—2005年、元日本地理学会長）が、月刊誌「地理」49—50巻（2004—2005）の1年間に1900—1964年にわたって刊行された地理書延べ134冊を名著として選び「ブックサーフィン」と題し紹介した。本稿は、紙数の制約から浮田の選書には及ばないが、愛媛県の地理学研究の歴史、研究者の業績紹介を意図したもので、これからの愛媛県に関する地理学研究への基本的参考文献と評してもよい著作である。

選書に先立って強調したいことは、愛媛県は地理学研究が盛んであることに注目したい。換言すれば、アーカイヴスと題するほどに地理書が多いこと背景である。先ず地理学研究者が四国でも最も多いことで、例えば、全国的学会である社団法人日本地理学会の会員2,865名のうち四国地区61名、このうち41%の25名が愛媛県在住である（2009年9月1日現在）。仮に四国の人口414万人のうち愛媛県の149万人、36%と対比しても多く、全国でも岩手県と同数で22位である。

次に、愛媛県に関する地理学文献を最近刊行された地誌書の山本正三責任編集（2005）『日本の地誌9，中国・四国』（朝倉書店）に掲載の参考文献によると、愛媛県の研究者の著作はおよそ100を数え、四国の他の3県のそれよりはるかに多い。学会会員数や著作数では、中四国で広島・岡山に次ぐほどである。

これらに共通する地理学研究の活発なことの理由は、次のように考える。

第1は、大学における地理学専門の教育と研究の充実である。愛媛大学では教育学部に続いて冒頭でふれたように旧文理学部人文学科に四国初の地理学専攻講座設置（1965年10月）、次いで学部改組で、これが法文学部人文学科に所属変更（1968年4月）、その後教育・法文両学部に大学院修士課程が設けられ地理学専攻の修了者が出るようになった。これらについては「愛媛の地理」の地理学教室20周年記念号（10号）、同40周年記念号（17号）に詳しい。このほか聖カタリナ大学や松山東雲女子大学にも人文地理学専任教授がいる。大学における地理学専門の教育と研究の充実は、とりもなおさず研究者のほかにも多くの地理教育者や公務員などを輩出してきたことで、本県の地理学界を力強く支えていると言えよう。

第2は、主として高等学校での地理教育担当者の活

動で、高社研地理部門の組織的共同研究の継続である。1956年に発足した高社研は、この50年間に県内各地を対象とした、共同研究は21回に及び、地域の自然・人文に関する分析と総合的地誌の成果が毎回報告書として公開されている。詳しくは地理部門刊『愛媛の高校地理教育50年のあゆみ』（2009）に譲るが、注目すべきは全国的に著名となった共同調査活動とともに、会員の個々の研究著作が多いことで、50年誌掲載の業績一覧は誠に驚くべきものである。つまり、愛媛県の地理教育界は、組織や個人を問わず地理学研究・地域研究のヴェテラン（Veteran：老練者）の宝庫で、これが四国で最も多い地理学界の貴重な人材源となっているとみても過言ではない。さらに、これらヴェテランのなかには、「伊予史談会」（1914年創立）や愛媛県立図書館などの郷土研究にも参画し、その出版活動に関わっていることにも注目したい。

2. 地理書アーカイヴス

1) 自然地理関係

地形や気候・陸水など自然環境に関する著書は極めて少なく、次ぎの二書は全く貴重なものである。40年に亘って地質や地形を研究し、愛媛大学教育学部教授だった永井浩三（1988）：『愛媛の地形』は小冊子に類する著作だが、本県の地形の概説をはじめ、山地・河川・平野・海岸・断層など各地の地形の成因と簡潔に述べ、永井の石鎚山カルデラの仮説が地質学的研究で実証されたことにもふれている。全く稀覯本とも言うべき著書で復刻が期待される。

深石一夫（1992）：『愛媛の気候』は、愛媛大学法文学部教授として1979年に着任以降、精力的に県内各地の気象現象や気候特性の研究に努め、その集大成として著したのが本書である。気候に関する体系的情報では本県は余り多くないとの前提のもとで、その気候の仕組みを海岸、盆地、山地、都市などについて分析し、気候区分によりその広がりや分布の特色を述べ、さらに気候と人びとの生活との関わりを四季のトピックを通して解説している。気候のメカニズムを知る専門書としてのみならず、気候環境の地域性を理解する基本的著書で、20世紀本県の自然環境研究で優れた成果となった。関連して松山地方気象台（1990）：『愛媛の気象百年』は、本県の気象データ集録と気象災害などの記録として貴重で活用に資するところが大きい。

市町村誌では、自然環境の概説がその冒頭にあるのが一般的であるが、松山市(1993)『松山市史第1巻・自然編』は、地質、地形、水系と温泉、地形などについて、既往諸研究の成果をもとに詳述され、文献目録とともに参考資料として価値がある。地質学者の鹿島愛彦編著(1997)『愛媛の自然をたずねて』は、自然観察のための地質・地形の理解のテキストとして利用に有用で、藤島弘純編(2001)『重信川の自然』では、松山平野と貫流する重信川の環境としての諸要因を知る好文献でもある。

2) 人文地理関係

(1) 歴史地理の部

愛媛大学の地理学スタッフの研究動向が、主として現代の地理的事象を対象にしているのに対して、その歴史的背景の研究は冒頭でふれたようにヴェテランの業績によって注目に値していることに注目したい。

窪田重治(1992)『城下町松山と近郊の変貌』は、松山市と周辺の松山平野を生涯のフィールドだとする著者の20余年に及ぶ研究の集大成である。封建制下の松山城下町の形成と変容過程を史料に基づいて絵図から刻明に復元することで、都市的機能の地理的展開の要因を明らかにし、さらに近現代の発展との関係、周辺の道後温泉町や外港三津浜町の発達の史的背景の特性、近代における交通革命をもたらした伊予鉄道郊外線沿線の集落変化にも言及した。これらによって、松山都市圏の歴史地理学的研究の基本的文献となった。

武智利博編(2004)『愛媛の歴史地理研究』は、伊予史談会で活躍している地理学研究者を主に、既往研究成果をテーマ別に収録し、特に各論ともオリジナルな図表による説述によって、地域的特性を明らかにするとともに、現代当面する諸課題へのアプローチへの貴重な研究視角を提供する文献である。収録論稿は、柚山俊夫「明治時代前期の愛媛県(伊豫国)における村の合併」、窪田重治「近世城下町松山の形成と変容」、門田恭一郎「伊予における水論について」、熊谷正文「愛媛近代漁業のあゆみ」、武智利博「瀬戸内海・宇和海地域の養殖業の展開」、越智齋「今治地方の綿工業の盛衰」である。

門田恭一郎(2006)『愛媛の水をめぐる歴史』は、歴史地理学的視点を背景に、県内主要河川の水利システムや水利紛争などについて史料に基づきその帰趨を明らかにするとともに、水利の地域性を論じた。なか

でも重信川水系と松山平野の灌漑史、県内各地の溜池水利、国領川の鉈毒問題などについて特論を展開する。大きな河川が少なく瀬戸内海側の降水量の少ない愛媛県について、水利問題から地域性にふれた研究書であるが、説述は平易である。交通史では清水正史(2004)『伊予の道』が、著書の近世と近代史研究の視点から陸路6街道と瀬戸内海を主とした海運について、交通政策や沿道の集落、経済社会の変容を述べる。本県の交通研究が少ないなかで、多くの史料からそれぞれの「道」の特性を明らかにした貴重な文献である。

これらの研究書に対して、高市盛周(1984)『愛媛の明治・大正史』は、愛媛新聞の若手記者だった著者が、同紙で「150万人愛媛の昭和史」と題して1981年に351回に及んだ連載記事を再録した一般向けの書である。県内の経済・社会の発展に関わる18の事項について、取材による実証的記述で必要な統計などもあげ、研究者にとっても課題を探索することのできる資料と言える。因みに著者(故人)は、愛媛大学文理学部地理学専攻1期生である。

次の3冊は歴史地理的研究の資(史)料としての著作であり、何れも明治初期の刊行であるとともに、愛媛県の前身の石鐵県地理掛だった半井梧庵が関わった地誌書である。半井梧庵(1966)『愛媛面影』は、明治5~7年ころ第1版が刊行されたものと言われ、当時の全14郡全村について、地勢・名所旧蹟・物産などを地図や挿絵を入れて記した全5冊に及ぶ「風土記」であり、1966年は縮刷本(影印)として原本再版したものである。愛媛県編(2009)『伊予国地理図誌』は、半井梧庵による原書をもとに明治5年の各郡・各町村の概要や統計を編纂したもので、東大史料編纂所の所蔵本を翻刻した。本書にも各郡の地図や町村域が併記され、城下町には鳥瞰図がある。現代の市町村誌の歴史編の記述に史料となるばかりか、近世末から近代移行期の地域研究に貴重な文献である。双書として刊行された伊予史談会の労に敬意を表したい。

なお、現代における愛媛県の行政体の改編を、その歴史的背景や地方自治制度の変遷を通して詳細に記述した著作に愛媛県(1964)『愛媛県町村合併誌(上巻)』がある。これは、1953(昭和28)年の町村合併促進法による合併記念の公式刊行誌で、古代から昭和前期に至る県域や6市、町村の成立と変遷を史料から誌した定本であるが、残念ながら上巻のみで終わった。

(2) 産業と農山漁村の部

農林業とこれに関係した農山村の研究が多いのは、愛媛大学教授だった法文学部の村上節太郎(1909-1995)と教育学部の相馬正胤(1913-2000)両先生の研究志向とその教育活動によるところが大きい。

相馬正胤(1963)：『愛媛の山村』は、論文や分担執筆などが多い著者として唯一の自著である。愛媛や高知両県の山村の林業や集落研究をもとに、本書は久万郷や銅山川流域、石鎚山周縁、南予地方、大野ヶ原などの山村を対象に、林業や土地利用、生活の形態の地域性、将来の課題を詳述した。著者の着実なフィールドワークと資料収集による研究活動から、小冊子ながら山村生活への愛着をにじみさせた山村研究総説の好著である。

愛媛県(1965)：『愛媛県産業地誌』は、村上節太郎を主査とし県史資料篇一巻の形で刊行されたもので、「漁村と水産業」(武智利博)、「林業と山村」(相馬正胤)、「農村と農畜産業」(村上節太郎)、「都市と工業」(石水照雄)の分担執筆による大著である。水産業では、沿岸漁業・水産養殖業などの発展過程と経営形態の変化を分析し、海区別考察でその地域性を明らかにした。本県水産・漁村の地理学的研究への基本的論稿である。林業では、諸藩の林野制度の沿革を述べ、主に山村の経営形態の地域性を明らかにした。同じ著書による前著(1963、上掲)の学術的資料と言える。農業では、農村の土地利用をはじめ農村集落の変容を明治以降の資料解説をもとに詳述するとともに、農畜産業の地域区分とその特性を明らかにした。都市と工業では、東予・中予・南予の各地域別に、工業化と都市化の展開、地域開発の課題などを述べている。総じて、戦後から高度経済成長期に入った県内産業の構造的変化と社会変容の推移を知ることのできる貴重な文献である。

村上節太郎(1967)：『柑橘栽培地域の研究』は、当時の文部省科研費刊行助成図書で、著書畢生の1,000頁を超え、489もの現地を主とした写真や多くの図表を掲載した大著である。表題に「愛媛」の文字がないが、研究の原点は本県の柑橘栽培と経営・流通であり、それは本書の日本における栽培の実態および広く世界各地でのフィールド研究の基礎となっていることに注目したい。とくに研究の視角として、可能な限り栽培地域に関する正確な統計収集とこれを裏付ける実態調査に努めてきた「村上地理学」を結集した著書である。

窪田重治(1990)：『愛媛の果樹産地の形成とその変

容』は、柑橘類を主に果樹栽培の主産地について、栽培地域の地理的条件をはじめ、生産者の技術開発、流通など経営指向に関して多面的考察を行い、その変容のメカニズムを多くの資料と実態調査を通じ明らかにしたものである。産地の対象は、松山平野と興居島・中島町など中予地域、宇和海沿岸の南予地域をはじめ、栽培作物の温州みかんから夏みかん、伊予柑、ハウスみかんなどを主たる研究対象にした。他の果樹では、松山の梨生産の衰退とぶどう栽培の増加などである。栽培地域の変容について、松山平野の例では、有産階級による商業的・企業的経営への転換、産地間競争に対応した品種更新、価格変動がもたらした安定経営の適地適作の展開などを要因として指摘した。果樹栽培に関する農業地理学からの理論的・実証的研究の著作と評してよい。

門田恭一郎(1989)：『愛媛の農漁業史研究』は、著者の上掲書(2006)に先行した主として近世史料をもとに、「伊予史談」をはじめ研究誌に掲載した論稿を収録したものである。宇和盆地の隠居制や内子町の近世在町の発展と変貌、松山平野各地の耕地整理事業、そして宇和島・吉田藩の漁業経済の制度的展開、明治時代の朝鮮近海出漁の過程などをテーマに、それぞれの特質を述べている。単なる史料解題ではなく、例えば隠居制の崩壊と地域の過疎化との関わりでの社会問題の発現を指摘するなど、地域研究での歴史的過程の現代との関わり探究を強調した著作でもある。

篠原重則(1991)：『過疎地域の変貌と山村の動向』は、県内の山村を主に集落の土地利用や社会の構造的変化を1970年代前後から約20年間に亘る研究活動を集大成した著作である。特に本書の第1部の集落の変貌過程の研究は博士論文で村落の共同体的性格の強弱から水田と畑地それぞれの卓越村、遠隔地と都市近郊村、商品経済の浸透度合などの諸類型をマイクロ分析し、5類型区分に関し、その要因と地域性を明らかにした。四国の過疎山村対象の研究であるが、わが国山村集落の変容について、人文地理学から理論的実証的に新たな研究成果をもたらしたものである。同書の第2部四国の山村と第3部の過疎地域の再開発と集落の再編成は、第1部の補論的論稿である。

篠原重則(1997)：『愛媛県の山村』は、前著に続き愛媛の多くの山村集落について、その土地利用と生業の成立と変容を詳述し、高度経済成長期における山村地域の対応から、その活性化への期待を内包した著作

である。篠原重則(2000)：『観光開発と山村振興の課題』は、愛媛県久万町、高知県西土佐村、香川県塩江町を事例に、観光開発と山村活性化との関係を論じ、内発型の久万町と外来型の塩江町などを対比し、住民の「主体性」如何が重要なカギとなることを強調した。注目すべき著作である。

妻鳥和教(1996)：『四国山村風土記』は、県内宇摩地方の製紙業の原点である三極(みつまた)栽培とその焼畑耕作の展開を史料や現況から調査し、「自然との共生」を広く四国各地の山村にまで求めた実態記録で、郷土史家の山村地理書だと言える。叙述もやわらかく一般への啓蒙書でもある。

武智利博(1996)：『愛媛の漁村』は、本県漁村の成立の歴史と漁業形態の概説に始まって、伊予灘や宇和海の漁法、漁業にまつわる信仰と供養、さらにはカップの伝承など、民俗的考察まで述べている。極めて具体的な記述は、漁村社会の海域別の地理的特性を明らかにすることに努めてきた著者の研究活動をも知る著作である。関連して、渡部文也・高津富男(2001)：『伊予灘漁民誌』は、瀬戸内海に面した本県西部の海域で営まれている漁業について、戦後の変化を漁業日誌をもとに漁種と漁法の具体的記述をはじめ、漁業生産の構造的変化を畜養・水産加工と流通など各局面から調査研究したものである。「地産地消」から「地産他消」へと水産業が如何に転換してきたか、漁村の活性化動向をも詳しく知ることのできる著作である。

村上節太郎(1986)：『伊豫の手漉和紙』は、農山村の加工業として発達した手すき和紙生産について、古い史料や明治以降の統計から概括し、さらに伝統的産業としての宇和地方の泉貨紙をはじめ大洲和紙、松山地方、宇摩地方などを対象に、原料生産と手すきから機械すきへの展開過程を詳述するとともに、それぞれの盛衰要因を指摘した。伝統産業に関する農業地理的・歴史地理的文献である。

神立春樹・葛西大和(1977)：『綿工業都市の成立』は、今治市の綿ネル工業を対象に、その発展の歴史地理的条件について明治・大正期の様相を解析した本県近代工業とこれによる都市化を論じたものである。その特色は、経済史学と人文地理学の研究者の共同研究によること、日本での近代工業史の研究で歴史地理的条件への接近が肝要であること、これがまた地理学研究の存立にも重要な寄与をなすことなどの問題提起のもとで研究した論著であることに注目したい。豊富な

統計資料や経営規模とその構成に関する表が参考となる。今治の綿工業は、当時、前近代的経営を温存しつつ工場制工業を展開し、都市としても発展したことは、日本の近代地方工業都市の一典型だと結論する。今治市の工業化と都市化の研究に極めて貴重な文献である。

越智齊(1987)：『今治織物組合90年史』は、上掲の今治市の綿工業の研究と関連した同業組合史としてのみならず、著者が地理学研究者で、前掲の武智利博編(2004)でも分担執筆し、今治の綿工業やタオル産業の研究を続けてきたことと関連しての文献である。明治以降の織物業の発達史をはじめ綿ネル、タオル生産などの動向を組合関係資料をもとに詳述し、地場産業史として貴重である。辻吾一(1982)：『えひめのタオル85年史』と併読されるとよい。

(3) 「地域」の地誌の部

藤岡謙二郎編(1966)：『岬半島の人文地理』は、副題に示すように、編者を代表とする文部省科研費による佐田岬半島の伊方・瀬戸・三崎の3町を対象とした1963年度の研究調査の報告で、主に人文地理学研究者ら17名による半島地域の自然・経済・社会の現況と振興策について詳述したもので、地理学からの本県対象の学術報告として最初であった。表題にあえて「岬半島」と掲げたのは、「岬」は文化の終点であり、「半島」は先端への通路、廊下地帯である、との認識を前提とし、その特有の地域性の解明と、低開発地域からの脱却への課題提起をも研究目標としたことに特色がある。1960年代初めの3町それぞれの社会的経済的特性の多様な状況を臨地調査から詳細に論じ、農水産業ともに経営拡大に対する農地や労働力の限界を指摘し、今日の状況と対比しての地域研究を進める貴重な文献である。

近藤福太郎(1982)：『高縄半島と芸予の島々』は、今治地方での教職生活を通じ、「その地理歴史的研究」の副題にあるように、芸予諸島の土地利用や特産品の除虫菊栽培・漁業をはじめ、今治市周辺の桜井漆器や大西町の造船、民間信仰などについて、人々の生活との関わりにもふれて平易な叙述をしている。学術書と言うより産業などを通しての地域生活誌として広く一般に広めたい著作である。

横山昭市編著(1988)：『肱川一人と暮らして』は、前掲の『岬半島の人文地理』(1966)と対照的な内陸の県内最大河川の肱川本支流の地誌である。編著者を

はじめ愛媛大学とその卒業生ら地理学・歴史学・考古学・生物学・民俗学など専門家7名による現地調査をもとに、「川の文化誌」に焦点をおいた著書である。これへのアプローチは、肱川と流域の自然環境、治水と古代文化の歴史、水運の変化と流域の集落、民俗とその背景などを詳述している。川のもたらした自然と生活文化が河谷ごとにどう形成され地域性をとどめているかを知る学術的啓蒙書である。

佐藤晃一編著(1999)：『新流域論』は、農政学者として愛媛大学名誉教授である編著者の退官記念論集で、12名の論稿を収めている。このなかで地理学では横山昭市「愛媛の風土環境の地域特性」と深石一夫「愛媛の河川の成り立ちと自然・水文の特性」が掲載され、他は農学関係の中山間地域論や河川流域と海との物質循環流域管理システム、居住圏域と流域空間などの論稿がある。これらの主たる研究対象地域は瀬戸内海と愛媛県で、副題に「愛媛発」とあるのはこれによる。「新流域論」とは、水系や集水域から転じて自然・生態・人文すべてを包括した概念であるが、さらに導水路や交通路で各流域が相互に結ばれ、交流の拡大で市街地と集落の地域連携軸の展開をみるに至り、ここに新たな資源と環境、そのエネルギー的循環の発生と人間生活の共生との課題があるとみる。白石雅也「流域未来型農業と管理システム—中山間地内子農業の歩み」、藤原三夫「居住と交流を志向する新たな流域空間の形成」など地理学の側から参考となる論文が多く、学際的著作として評してよい。

玉井建三(2003)：『江戸・東京のなかの伊予』は、対象が東京であることで本県地誌の範疇ではないと思われるが、その異色さと著者が人文地理学者(聖カタリナ大学教授)であることから掲示した。つまり、伊予や愛媛と深い関係のある各藩屋敷跡をはじめ、近世から近代の文人・武人の活躍や住居、墓所の所在を史料などで実地調査し詳述した本書は、江戸・東京に伊予文化の投影地図を読むことができる書だと言える。例えば、南予の新谷藩の上屋敷があったことで、浅草新谷町が誕生し、伊予出身の理学者青地林宗の墓が1928(昭和3)年まで、その近くの寺にあったことなど読者を驚かす記述が多い。

愛媛県生涯学習センターでは、1991年度から地域文化実態調査を逐年実施し、その膨大な報告書を、「昭和を生き抜いた人々が語る」の副題のもとに、特定地域を対象とした調査研究書として刊行した。これは、既

往文献による研究もさることながら、産業経済活動と生活との関わりを現地で聴き取りを併せて、県民の「昭和の記録」としたもので、多くの写真や図表などによって、理解を容易にしている。地誌の研究資料としても貴重な刊行書と言える。各巻を詳しく紹介するには紙数が足りないので、タイトルと対象地域のみに止める。

『瀬戸内の島々の生活文化』(1992)は、越智・忽那諸島を対象に、自然環境の変遷や農民・漁民・商人・海運業者・職人の生活史を調査。『宇和海と生活文化』(1993)は、佐田岬半島から宇和海沿岸にかけての農家と漁家の暮らし、八幡浜市の発展や各地の先覚者の伝記などを記述。『県境山間部の生活文化』(1994)は、四国山地にあって高知県・徳島県と接する久万町をはじめ上浮穴郡の町村や新宮村・城川町・広田村などの林業・焼畑・茶の生産、峠越えの交流、民族信仰など山村の地域性を説述。『河川流域の生活文化』(1995)では、肱川や岩松川・重信川などの本支流流域の自然環境をはじめ主な流域の産業と大洲市、野村町、松山市などの川と水資源の関わりを主に、その特性を述べている。『臨海都市圏の生活文化』(1996)は、瀬戸内海に臨む松山・伊予・今治・四国中央新居浜の諸都市を主に、海運業や地場産業、近代的鉱工業の発達をはじめ、都市化のなかで持続されている祭りや民俗信仰などを詳述。『愛媛の景観』(1997)では、石鎚山をはじめ山地や海岸や島々、河谷などの自然景観、植生や動物など生物、内子町や宇和町・小松町などの町並みと人びとの暮らし、古い鉱山跡や段畑など各地の景観構成の歴史と現状を調査し、そのアメニティ性を詳述。『愛媛の技と匠』(1998)は、かつお節をはじめ味噌や酒など食品、伝統工芸品の砥部焼・菊間瓦・漆器・水引きなど、食・芸・衣・住の各部門に及ぶ地場産業の立地と技術の伝承を調査し、それぞれのすばらしさを指摘する。『愛媛の暮らし』(1999)は、県内70市町村(当時)のうち30市町村を対象に、農山漁村特有の生活様式を通しての家族の暮らしや通過儀礼、年中行事などを詳しく調査し、核家族化の進行との関わりにもふれている。『愛媛の祭り』(2000)は、農山漁村や都市など各地に伝わる祭礼について季節的特色、その行事と住民生活との関わりをはじめ、南予に多い神楽や文楽、松山地方の伊予万歳などの歴史と保存の現況、松山祭りなど新しい動向についても詳述し、県民の地域アイデンティティの高揚を期待した報告。

愛媛県生涯学習センターでは、上掲の「生活文化」シリーズに続いて、えひめ地域学調査を行い、次の報告書を公刊した。『えひめ、その食とくらし』(2004)は、現代の食文化として郷土食の例に久万山食材の復活、郷土料理の創作をとりあげ、各地でみられた儀礼食を調査、さらに東予・中予・南予の農山村や河川流域の食の特色をも詳述し、特産として茶と酒造りにもふれている。『えひめ、その住まいとくらし』(2006)では、県内各地の自然環境と住居との関係を、東予の「やまじ風」や南予の「石垣集落」をはじめ、農山漁村の住居と暮らしの特性を調査、木造校舎の保存や町並み整備などの現代的意義についても言及する。

愛媛県ないし四国の宗教地理学・文化地理学研究に関わる民間信仰に四国遍路がある。これについて、県生涯学習センターは次の研究調査報告書を公刊し、遍路の歴史や遍路道など貴重な総合調査で参考文献である。『四国遍路のあゆみ』(2001)、『伊予の遍路道』(2002)、『遍路のこころ』(2003)。

(4) 全県の地誌の部

村上節太郎(1959):『愛媛県新誌』(改訂版)は、その初版(1953)をふくめ戦後最初の全国的地誌(郷土新書)のなかの愛媛県版で、一人の著者によるその精力的調査と執筆によっている。内容は、地形・気候など自然環境をはじめ本書の約半分を当てて県内16地域の土地利用や産業、主要集落形態などを詳述、農林水産や工業の発達、交通事情や商業流通の現状、居住形態や人口分布の変化にも現地調査によって地域特性を述べている。戦前・戦後の本県の経済社会を現在と対比して昔日の感を抱かず貴重な地誌で、結論として、県民は恵まれた環境のもとで生活しているが、惰性的で信州人に比べて知性と自主性に欠けていると評していることに、改めて注目したい。

横山昭市(2000):『愛媛・新風土記』は新書版であるが約400頁の大冊である。上掲の村上節太郎の著作以来40年を経ての地誌で、この間の多くの地理学的文献資料が公刊されてきたことを背景としている。それは、現代愛媛の「かたち」・「すがた」を「風土論」として記すことを目的として、風土環境の地理的内容、現代の政治的・経済的・社会的局面の歴史的背景、とくに近現代の「愛媛のすがた」の変貌とその投影について説述した。これらの理解を容易にするため多くの地図や写真、統計などを精選して掲載したが、広く県民が

県土にいつそうの理解と将来の姿を描くことに資する文献となることを著者は期待している。

横山昭市編著(2009):『えひめ・学・事典』は、地理学や歴史学・民俗学・食文化など県内に住む20名の専門家が、精送された歴史・地誌・社会・文化ならびに平成の合併による20市町などの編別で合わせて90の事項について、見開きで要約説述した読みやすい「郷土誌ハンドブック」として刊行された。言わば郷土研究へのミニマム・エッセンシャルの啓蒙書である。

次に掲げる地誌書は、極めて総合的・学術的な大著で多数の地理学研究者が分担執筆したもので、それぞれの時代の貴重な文献である。

青野壽郎・尾留川正平責任編集(1969):『日本地誌・18』は四国編で、各県とも県総説と県内地域誌から構成されている。前者では、主に第1次産業は村上節太郎、後者の松山市のほか中予を横山昭市、東予を石水照雄、南予を相馬正胤が分担執筆、ほかに武智利博、篠原重則、亀岡佳章らが資料提供で協力した。全編を通して叙述の統一と地図化は詳細適切であるとともに、1960年代初めの県内事情と地域的特性を知ることができる当時の基本的地誌である。

山口恵一郎編(1975):『日本図誌大系・四国』は全12巻のひとつで、明治から昭和40年代までの5万分の1の地形図によって、地域の土地利用・地形の変化などから地誌的理解を読みとる画期的な図誌が刊行された。愛媛県では、東予から始まって南予まで都市域のみならず特徴的地形と土地利用、集落立地をみる33地区について、その変化を記述したものである。執筆者は大学関係者のみならず高校で地理を教えるヴェテランを含め15名を数えた。読図の重要性のみならず近代からの地域変容を知る貴重な資料となった。

愛媛県の文化行政で、戦後最も注目すべきもののひとつに、『愛媛県史』全40巻が1981(昭和56)年度から1988(昭和63)年度に亘って刊行されたことで、まさに「昭和の文化遺産」となったが、なかでも全国的に注目を浴びたのが『地誌』で総論と地域篇で全5巻を数えたことである。各巻800頁ほどの大著のため以下各巻について主要事項や対象地域のみを記すが、執筆者は大学関係者のみならず多くの高校教員の協力を得たことと、地域調査活動の成果を反映し、愛媛の地理学界あげての総力の結実であったことを特記しておく。

『地誌Ⅰ(総論)』(1983)は、横山昭市(部会長)ら8名による執筆で、地域設定の検討を前提に、地形

・気候・植生など自然環境の特性、人口構造・産業経済や商業・交通の発達と地域性のほか、集落と都市の立地、観光地域、行政域とその改編について詳述。『地誌Ⅱ（中予）』（1984）は村上節太郎部会長ら10名の地誌Ⅱ部会執筆の初巻であるが、各巻冒頭で当該地域の地誌の歴史を解説する。中予地域について松山市・松山平野・北条平野・伊予灘海岸・忽那諸島・久万高原の地誌と歴史的背景にもふれて述べている。『地誌Ⅱ（南予）』（1985）は、南予の地域区分を述べ、都市域別による大洲・八幡浜・宇和島のほか宇和・野村、鬼北、御荘・城辺の地誌を都市機能や一次産業の発達、集落立地などについて詳述。『地誌Ⅱ（東予西部）』（1986）は、今治市、朝倉・玉川、野間、そして越智と上島など芸予諸島を対象。とくに今治市ではタオルや造船などの工業立地、商業や海運、周辺地域の農水産業と集落構造を述べる。『地誌Ⅱ（東予東部）』（1988）は、西条市以東を対象として、周桑平野の農業と集落立地をはじめ西条市の新田開発や工業化、新居浜市では別子銅山の盛衰と重化学工業の発展、さらに伊予三島や川之江地域では紙・パルプ工業の立地、銅山川流域（嶺南）の農業などについて述べている。総じて全5巻は多くの統計資料と地図・写真などを掲載し、叙述の理解を容易にする一方、現地調査をふまえて地誌的研究の水準を高めた貴重な文献である。

松友孟・横山昭市・景浦勉監修（1991）：『愛媛県風土記』は、全国の風土記シリーズの本県版で、A4版アート紙、500頁超の大冊である。刊行時期からして上述した『愛媛県史』の完結を機に、その成果を一般向けに、多くの写真をも掲載してビジュアルな歴史・地誌書として編集執筆されたものである。歴史探訪やふるさと探訪、伝統と文化遺産、人国記の4部からなる本書のうち、ふるさと探訪が当時の70市町村の自然や産業・交通・観光の特色を記述した地誌で、全執筆者（編集委員：稚岡謙治）延べ60余名の3分の1がこれを担当、また終ページの約2分の1がこれに当てられている。分担執筆者のほとんどが高校地理担当の先生であることは、『愛媛県史（地誌Ⅱ）』と共通する。

愛媛県（1993）：『愛媛の風土と観光』は、監修を横山昭市、編集執筆を門田恭一郎や稚岡謙治の地理学関係者のほか歴史や文化、郷土料理など専門家による本県の風土の特色の概説のほか、本書の刊行目的の観光振興策定資料とするため1000頁近い大冊のほとんどを70市町村の行政と観光資源の紹介に当てている。特に

市町村編の記述では上記の地理学関係者が当たった労作の結実で、「市町村観光百科全書」と言うべき著作である。

冒頭に紹介した『日本の地誌9, 中国・四国』（2005）は、35年前に刊行された『日本地誌・18』に対して、この間の経済社会の変化や地域の研究成果の充実などから、新たな地誌書の刊行をみた四国編の学術書である。愛媛県については横山昭市・深石一夫・篠原重則・寺谷亮司・堤純・門田邦彦などがそれぞれ専門分野から分担執筆。これまでの地域研究を総合的に集大成した21世紀冒頭の著作である。

内田九州男・武智利博・寺内浩編（2009）：『愛媛県の不思議事典』は、一般向けの歴史・文学・民俗・産業・地理・自然のジャンルに亘る愛媛像理解の書で、関心を惹く項目と平易な解説が特色である。産業や地理では、9名の高校地理関係者が分担執筆。「今治市のタオル生産が日本一となった理由」とか「日の丸みかんはなぜ日本一なのか」「県境の島・瓢箪島伝説」などキャッチフレーズに工夫がある。広く地理的知識の普及に資する書として興味を誘う専門家による啓蒙書。

なお本稿の最初に紹介した愛媛県高社研地理部門の共同調査研究報告書は、21冊に及ぶため紹介を略すが、その一覧については同部門刊の『愛媛の高校地理教育50年のあゆみ』（2009）を参照されたい。

3. あとがき

本稿で取り上げた愛媛県に関する地理学・地誌学著作は60余冊で、若干の内容紹介と評を記したが、これらを参考にいつそこの本県地理学界の充実発展を期待したい。個別の研究論文のアーカイブスは評者の力量では及ばないほど多数で優れたものも多い。ただ、強いて極言すれば、「著書」は著者の研究業績の集大成であるとともに「人格」の表象でもある。また、著作を展望すると、戦後60余年を経たこの間に、昭和時代の後半、20世紀末での『愛媛県史』地誌編に代表される大冊の刊行は、経済状況と読書層の変化で21世紀に入って、どこまで続けられるかに思いを馳せている。本県地理学界が最も充実し、著作刊行の意欲が継続されるには、どうすれば良いかが問われてもいる。

掲載文献

- (掲載は著者名の50音順、非は非売品、品切れの文献は図書館などで閲覧されたい。)
- 青野壽郎・尾留川正平責任編集 (1969) : 『日本地誌・第18巻』(香川県・愛媛県・徳島県・高知県)二宮書店, 551頁。
- 愛媛県 (1964) : 『愛媛県町村合併誌(上巻)』, 418頁(非)。
- 愛媛県 (1965) : 『愛媛県産業地誌』, 578頁(非)。
- 愛媛県編 (2009) : 『伊予国地理図誌(東予)』(翻刻), 伊予史談会, 272頁。
- 愛媛県編 (2009) : 『伊予国地理図誌(中・南予)』(翻刻), 伊予史談会, 319頁。
- 愛媛県高社研地理部門編 (2009) : 『愛媛の高校地理教育50年のあゆみ』高社研地理部門, 109頁(非)。
- 愛媛県史編さん委員会(1983) : 『愛媛県史・地誌Ⅰ(総論)』愛媛県, 881頁。
- 愛媛県史編さん委員会(1984) : 『愛媛県史・地誌Ⅱ(中予)』愛媛県, 821頁。
- 愛媛県史編さん委員会(1985) : 『愛媛県史・地誌Ⅱ(南予)』愛媛県, 960頁。
- 愛媛県史編さん委員会(1986) : 『愛媛県史・地誌Ⅱ(東予西部)』愛媛県, 890頁。
- 愛媛県史編さん委員会(1988) : 『愛媛県史・地誌Ⅱ(東予東部)』愛媛県, 852頁。
- 愛媛県生涯学習センター (1992) : 『瀬戸内の島々の生活文化』, 425頁(非)。
- 愛媛県生涯学習センター(1993) : 『宇和海と生活文化』, 414頁(非)。
- 愛媛県生涯学習センター (1994) : 『県境山間部の生活文化』, 372頁(非)。
- 愛媛県生涯学習センター (1995) : 『河川流域の生活文化』, 449頁(非)。
- 愛媛県生涯学習センター (1996) : 『臨海都市圏の生活文化』, 466頁(非)。
- 愛媛県生涯学習センター (1997) : 『愛媛の景観』, 417頁(非)。
- 愛媛県生涯学習センター(1998) : 『愛媛の技と匠』, 402頁(非)。
- 愛媛県生涯学習センター(1999) : 『愛媛の暮らし』, 436頁(非)。
- 愛媛県生涯学習センター (2000) : 『愛媛の祭り』, 299頁(非)。
- 愛媛県生涯学習センター (2004) : 『えひめ、その食と暮らし』, 愛媛県教育委員会, 250頁(非)。
- 愛媛県生涯学習センター (2006) : 『えひめ、その住まいと暮らし』, 愛媛県教育委員会, 211頁(非)。
- 愛媛県生涯学習センター(2001) : 『四国遍路のあゆみ』, 遍路文化の学術整理報告書, 348頁(非)。
- 愛媛県生涯学習センター (2002) : 『伊予の遍路道』, 遍路文化の学術整理報告書, 319頁(非)。
- 愛媛県生涯学習センター (2003) : 『遍路のこころ』, 遍路文化の学術整理報告書, 315頁(非)。
- 愛媛県商工労働部 (1993) : 『愛媛の風土と観光』愛媛県観光協会, 968頁(非)。
- 内田九州男・武智利博・寺内 浩編 (2009) : 『愛媛県の不思議事典』新人物往来社, 220頁。
- 越智 斉 (1987) : 『今治織物組合90年史』今治織物工業協同組合, 333頁(非)。
- 鹿島愛彦編著 (1997) : 『愛媛の自然をたずねて』築地書館, 212頁。
- 門田恭一郎 (1989) : 『愛媛の農漁業史研究』日本図書刊行会, 248頁。
- 門田恭一郎 (2006) : 『愛媛の水をめぐる歴史』愛媛文化双書刊行会, 224頁。
- 神立春樹・葛西大和 (1977) : 『綿工業都市の成立』古今書院, 215頁。
- 窪田重治(1990) : 『愛媛の果樹産地の形成とその変容』青葉図書, 339頁。
- 窪田重治 (1992) : 『城下町松山と近郊の変貌』青葉図書, 359頁。
- 近藤福太郎 (1982) : 『高縄半島と芸予の島々』第一法規出版, 181頁。
- 佐藤晃一編著 (1999) : 『新流域論—愛媛発・新資源形成型循環空間の創造—』農林統計協会, 358頁。
- 篠原重則 (1991) : 『過疎地域の変貌と山村の動向』大明堂, 330頁。
- 篠原重則 (1997) : 『愛媛県の山村』愛媛文化双書刊行会, 263頁。
- 篠原重則 (2000) : 『観光開発と山村振興の課題』古今書院, 220頁。
- 清水正史 (2004) : 『伊予の道』愛媛文化双書刊行会, 214頁。
- 相馬正胤 (1963) : 『愛媛の山村』愛媛郷土叢書4, 松菊堂, 132頁。
- 高市盛周 (1984) : 『愛媛の明治・大正史』愛媛文化双

- 書刊行会, 242頁。
- 武智利博 (1996) : 『愛媛の漁村』愛媛文化双書刊行会, 277頁。
- 武智利博編 (2004) : 『愛媛の歴史地理研究』(財)関奉仕財団, 333頁。
- 玉井建三 (2003) : 『江戸・東京のなかの伊予』(財)愛媛県文化振興財団, 293頁。
- 辻 悟一 (1982) : 『えひめタオル85年史』四国タオル工業組合, 462頁 (非)。
- 妻鳥和教 (1996) : 『四国山村風土記一焼畑・落人今昔物語』第一法規出版, 241頁。
- 永井浩三 (1988) : 『愛媛の地形』愛媛地学会, 83頁。
- 半井梧庵 (1966) : 『影印, 愛媛面影』愛媛出版協会, 全5巻。
- 深石一夫 (1992) : 『愛媛の気候』(財)愛媛県文化振興財団, 319頁。
- 藤岡謙二郎編 (1966) : 『岬半島の人文地理一愛媛県佐田岬半島学術調査報告一』大明堂, 353頁。
- 藤島弘純編 (2001) : 『重信川の自然』創風社出版, 213頁。
- 松山市 (1993) : 『松山市史第1巻抜刷自然編』松山市, 371頁 (非)。
- 松山地方気象台 (1990) : 『愛媛の気象百年』(財)日本気象協会松山支部, 257頁。
- 松友 孟・横山昭市・景浦 勉監修 (1991) : 『愛媛県風土記』旺文社, 551頁。
- 村上節太郎 (1959) : 『愛媛県新誌』(改訂版)日本書院, 217頁。
- 村上節太郎 (1967) : 『柑橘栽培地域の研究』松山印刷, 1089+16頁 (非)。
- 村上節太郎 (1986) : 『伊豫の手漉和紙』東雲書店, 396頁。
- 山口恵一郎編 (1975) : 『日本図誌大系・四国』朝倉書店, 344頁。
- 山本正三(編集委員長)・森川洋・篠原重則・奥野隆史編 (2005) : 『日本の地誌9, 中国・四国』朝倉書店, 636頁。
- 横山昭市編著 (1988) : 『肱川・人と暮らし一川の文化誌一』(財)愛媛県文化振興財団, 228頁。
- 横山昭市 (2000) : 『愛媛・新風土記』(財)愛媛県文化振興財団, 410頁。
- 横山昭市 (2009) : 『愛媛・学・事典』(財)愛媛県文化振興財団, 198頁。
- 渡部文也・高津富男 (2001) : 『伊予灘漁民誌』(財)愛媛県文化振興財団, 271頁。

以上